

東成区の昭和 やぶにらみ日記

絵と文・柳たかを

ミルクの香り

小学生時代の記憶で鮮明なのは牛乳(ミルク)の思い出。
牛乳は贅沢な飲み物だった。

夏、初めてその店のソフトクリームを味わう機会があった。
そこはかたない本物のミルクの香りが脳天にとどくというか、
ちょっと言い表せない懐かしいような満ち足りた気持ちに
浸った記憶がある。



(昭和の給食、コッペパン&マーガリン・シチュー・脱脂ミルク)

毎朝、牛乳配達員が牛乳瓶でガチャガチャ鳴る大きな布袋を
自転車の両サイドに括り付け、家の門口に取り付けられた木
製の牛乳箱に配達していく。飲み終わった空瓶を回収し代わ
りに新鮮な牛乳瓶を入れて行ってくれる。

当時、僕はミルクの香りにすごく敏感だった。我が長屋と背
中合わせに難波から生駒方面につながる国道 308 号線が走っ
ており、車道の向こうにペコちゃん人形が首を振るソフトク
リームスタンドが開店した。国道を挟んで立つと彼方の店か
らホワンとした独特のミルクの芳香が風に乗って漂ってきて、
「ああ～ええ匂いやなあ」としばし心奪われた。小学生になる
少し前のことだ。

小学生になって数年後、親にねだっ
てわが家でも一時期毎朝の牛乳配達
をしてもらえるようになった。ただ
し毎日 180CC の牛乳瓶を 1 本ずつ、
それを姉と半分ずつ分けて大切に飲
んだ。

当時、小学校では給食が支給されて
いて、メニューはコッペパンと一切
れのマーガリン・肉ジャガなど日替
わりの煮物・サラダ、そして脱脂ミ
ルク、このミルクは牛乳瓶の牛乳と
は別物だった。

やや茶色みがかった白色の脱脂ミ
ルクのお椀をかたむけて液体を飲み乾
すと、食器の底にこげ茶色の粉の残
留物が残った。ミルク独特の芳香と
いうものがなく、生温かい液体が喉
を通るたびにかすかな臭みがあって
敏感な子は全部飲み干すことができ
なかつたようだ。

のちに知ったが、バターを作ったあとの残存物(絞りかす)で
栄養価は高い、戦後の栄養不足の、すなわち団塊の世代(まさ
に私がそう)の子供たちの栄養補助食品としてアメリカから大
量に提供され子供たちの健康作りに貢献してくれた。

そこで思い出すのは、姉と毎朝半分ずつ分けて飲んだ牛乳瓶
のミルクこそ僕にとってホンモノの“ミルクの味と香り”で、
さらにその数年前に味わったペコちゃんのソフトクリームの
ミルクの香りが続く。

香りの記憶は歳を経てもあまり衰えないようで、濃厚なミ
ルクの味と香りにふれると今もなんとも言えない懐かしくつ
ろいだ気持ちが湧いてきます。

東成区の昭和



(1) 給食



東成区の昭和



(2) 給食



東成区の昭和



(3) 給食



東成区の昭和



(4) 給食



東成区の昭和



(5) 給食



東成区の昭和



(6) 給食



東成区の昭和



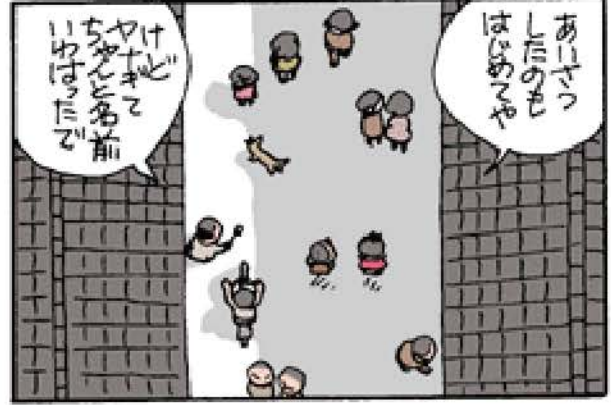
(7) 給食



東成区の昭和



(8) 給食





東成区の昭和



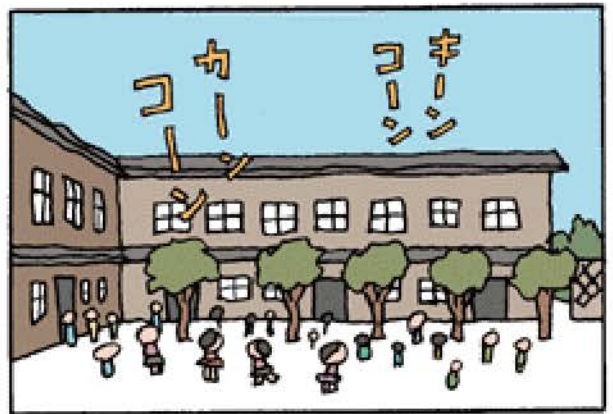
(11) 給食



東成区の昭和



(12) 給食



東成区の昭和



(13) 給食



東成区の昭和



(14) 給食

